

# 明日 への 話題

## スプートニク・ ショックの 既視感



岡三証券グループ  
取締役社長

しんしば ひろゆき  
新芝 宏之

1957年、人類初の人工衛星「スプートニク1号」の打ち上げが成功。フルシチョフは雑誌タイムの表紙を飾り、世界大戦後の覇権国を自負する米国社会は大きな衝撃を受け、ケネディは演説で「人類を月に運ぶ」と叫んだ。両氏による1962年の核戦争の瀬戸際「キューバ危機」は冷戦のピーク、時代は下って1989年の「ベルリンの壁崩壊」は冷戦終結の象徴だったと言えるのではないか。その後30年に亘って平和の配当がもたらされ、米国覇権の下でデジタルイゼーション、グローバリゼーションが進んだが、一方で格差という大きな副作用を生んだ。

今や時代は大きく逆回転を始めている。その象徴がトランプ大統領だ。ウクライナ侵攻、中東紛争により既に第三次世界大戦はその端緒にあるとの見方すらある。翻ってディープシーク・ショックは、スプートニク・ショックの既視感となるのかどうか。かつての宇宙競争に対して今回は人工知能へと領域は異なるが、経済面、軍事面での覇権を争う鍵を握ることは間違いない。

ところでEVについて威勢の良かった欧米勢は早々にEV100%化宣言を撤回した。やっぱり日の丸のハイブリッド戦略が正しかったと留飲を下げた方も多かったのではないか。しかし、もはや本質は、車を動かす動力ではなく頭脳に移っている。イーロン・マスクが目指すのは人間のような脳を持った車だ。エヌビディアのファンCEOは「AIの次のフロンティアはフィジカルAI」だと発信している。

かつて私達は「Windows95」に興奮し、インターネットはアマゾンに代表されるバーチャルな大空間eコマースを創造した。突然、賢くなった「ChatGPT」は新たなAI時代の幕開けだったと歴史は評価するのではないだろうか。AIは車の概念を変え、車の1/20のコストで作れるロボットの進化に繋がる。ネットの世界では実現出来なかった人の代わりにモノを動かすというフィジカルな世界が目の前の未来だ。今、中国ではAI研究が格段に進み、様々な問題を抱えながらも雨後の筍のように最新の自動運転車、ロボットの企業が生まれていると聞く。イーロン・マスクは人類1人に対して3体から5体のロボットの社会を予想する。そして究極は人類よりも賢くなった人工知能に、人類の脳を繋げることが必要だと主張している。

歴史の変遷は、韻を踏むのだろうか。今、起こっている人工知能の進化は人類社会そのものを変えてしまう破壊力を持ち、米中の覇権争いの行方を左右すると感じるのは私だけではないだろう。